The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

『常盤井殿記録』にみる真言教学について
――特に道順の教説を中心として――

中村本然

一　『常盤井殿記録』について

『常盤井殿記録』[1]は、亀山法皇（一二四九―一三〇五）の仙洞御所であった常盤井殿において、真言僧である了遍（一二二四―一三一一）・実叡・実縁・観昭・覚親・道順（？―一三二一）などによって、嘉元三年（一三〇五）四月十四日から二十九日までに、都合八回に亘って開かれた真言密教に関する議論を綴った記録である。『常盤井殿記録』には、題号を異にする『真言宗義精談集』『道順記』『醍醐方教相宗義』等の異本が現存することを調査によって確認し報告している。[2]因みに『常盤井殿記録』は議論が開演された場所、『真言宗義精談集』は議論の内容、『道順記』は議論を記録した人物、『醍醐方教相宗義』は特に醍醐寺で提唱された教学など、本記録の持ち合わせている特徴が題名として採用されている。

二　『常盤井殿記録』にみる論義について

『常盤井殿記録』に散見する論義・日程並びに参集した人物等を列挙しておこう。

①恵果和尚の言葉「冒地の得難きに非ず。この教に逢うことの易からざるなり。」に関する論義〈四月十四日〉…亀山法皇・宮・実縁・実叡・道順・入道大納言・〈後宇多上皇〉

②機根の優劣と教説の浅深に関する論義〈四月十四日〉…亀山法皇・宮・実縁・実叡・道順・入道大納言・〈後宇多上皇〉

③法爾の体性に関する論義〈四月十五日〉…亀山法皇・宮・実叡・道順・〈後宇多上皇〉

④『理趣釈』等所説の「定恵均等。又云わく、二根交会」に関する論義〈四月十七日〉…亀山法皇・宮・了遍・実縁・実叡・道順・入道大納言・〈後宇多上皇〉

⑤自性法身と慈悲に関する論義〈四月十八日〉…亀山法皇・宮・了遍・実縁・実叡・道順・入道大納言・〈後宇多上皇〉

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

⑥真言行者と自利・利他に関する論義〈四月十九日〉…亀山法皇・宮・了遍・実縁・道順・入道大納言・〈後宇多上皇〉
⑦法爾と随縁の二門に関する論義〈四月二十三日〉…亀山法皇・宮・実縁・観昭・道順・入道大納言・〈後宇多上皇〉
⑧已入・未入及び邪行・正行に関する論義〈四月二十六日〉…亀山法皇・宮・実縁・観昭・道順・入道大納言・覚親・〈後宇多上皇〉
⑨法爾の修行と迷情対治（修生）の修行に関する論義〈四月二十九日〉…亀山法皇・宮・実縁・道順・入道大納言・覚親・〈後宇多上皇〉

※〈後宇多上皇〉の臨席については不明＝筆者

それではこれより議論された論義の一々について触れることにする。

①恵果和尚の言葉「冒地の得難きに非ず。この教に逢うことの易からざるなり。」に関する論義〈四月十四日〉

実叡により、空海（七七四―八三五）の師恵果（七四六―八〇五）が、日頃口にしていた言葉に質疑が起される。実縁はこの文を「背暗向明の次第、上求下化の行相」と捉え、衆生の機根に随って成仏・不成仏が生じ、極果に至らない機根の存在を示唆する。(3)

道順は、性徳円満海の法門である密教は、修行種因海の教門の顕教とは異なる。密教に有縁の衆生は万行を本来具有しており、来世に証果を待つことはない。本有の覚体そのものである密教者に機根の浅深や縁の熟・不熟の別を設け、久成の仏心に覚・不覚を論ずる必要はない。恵果の言葉は、法爾大成なる密教の深意を聞き、衆生が本来法然なる覚体に目覚めることにある。密教は、機根に随って法門を施説する他受用応化仏による顕教と異なり、一切の機根や教説を離れた法仏の自内証の法門であり、鈍根・利根共に久遠実成なる如来とみる、(4)と論じる。

②機根の優劣と教説の浅深に関する論義〈四月十四日〉

実叡は「法爾大成の深旨」や「本具輪円の覚体」を真言教学の本意としながらも、「冒地の得難きに非ず」等の解釈には距離を置く発言をする。(5)即ち恵果の文を菩提を未だ得ていない衆生を対象とした言葉と受け取る。『大日経疏』(6)にも明らかなように、真言密教では浅略・深秘の二門が施設される。深秘門では本有の具徳が説かれ、浅略門では修行による成仏が論じられるように、恵果の言葉は転迷開悟を意味する一般論にほかならない。

道順は、真言密教は自性法身の常恒なる説法であり、大日如来の法界宮における甚深にして広大なる教説である。法界宮のあらゆる生類は大日尊の平等なる智身であり、八葉蓮華中の諸仏と六道に輪廻する衆生の性徳に勝劣はなく平等である。『大日経疏』には無上正等覚は法において平等であり高

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

下なきもの、[7]と説かれる。従って転迷開悟の衆生は存在しない。真言宗では六道を行する因人を本有、常楽我浄を備える果仏も本有、また三密の修行も本有、発心・修行・菩提・涅槃・方便の五転も本有とみなす。法爾の薩埵が法爾の修行をし、法爾の衆生を済度し、法爾の大果を顕わす法門である。これを本有（門）に対する竪の修生（門）とする。大日如来は本来大日如来にして、金剛薩埵は法然の薩埵である。如来の境地は一様にして、浅深を離れ高下を超えている。これを本有の横証という。

実叡は、真言宗は衆生の鈍根・利根に随って、浅略・深秘の法門を開設する。[8]浅略は転迷開悟の法門であり、玄妙の極果を修得するための智が説示される。この法門は『釈摩訶衍論』所説の生滅門に相似し、修行種因海に酷似する顕教の法門といえよう。『大日経疏』[9]にも修行者による未来の得益が論じられる。よって本来の具徳（のみ）に執着することは謬りであり、鈍根の行者は修行を満たすことがなければ、密教に出逢う縁に恵まれても、成仏しないという。

臨席の宮が、機会を窺われるように言葉を挟まれる。[10]密教を生滅門の法門といい、修行種因海に準えることは、真言法の大綱に背く。『辯顕密二教論』[11]において、応化仏の開設する教を顕教とし、法仏の教を密蔵とするように、顕教は随他意語の権説にして、密蔵は随自意語の実説である。何を根拠として自性身の深秘なる教説を、応化身の生滅門の説と扱うのか。恵果の「冒地の得難きに非ず云々」を、成仏の難得の意味に置き換える真意を諮りかねる。顕教と密教を弁えて空海の意図を詮索すべきである。

道順は、機根に応ずるか否かの違いに顕密二教の優劣が論釈される。空海の稟伝は「法爾法然の成証」にあると主張する。[12]顕教は、衆生と仏との一如を談じながらも、迷妄を破す対治道を設ける。即ち迷悟無きことを掲げながら、四苦八苦等を悲しみ、彼岸における解脱を志向させる。法相教学が思想的根拠とする『成唯識論』[13]では、真如と無常は遂に一致することはなく、円成実性と依他起性は別論とされ、迷悟不二の境に入ることはない。三論教学が所依とする『中観論疏』[14]は、有法を患累とし、空性を立てる。真空の理には、本来患累の有法はないので、有執を破し、また空執を破す。しかしながら迷悟不二の境に入ることはない。天台宗或いは有宗も真如随縁を表詮しながら、即仏の理に至ることはない。華厳の教学も事理の真如において円融を観ずるが、理理の真性における無礙を語ることはない、と論断する。

③法爾の体性に関する論義〈四月十五日〉

勅定（亀山法皇カ）が下される。真言教学について、諸僧によって様々な理論や正邪の説相が披露された。修行者の機根の浅深や法爾の体性について諸説が散見することは、真言

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

宗の本意を離れることになる。偏執に惑うことなく、安住の正理を表詮すべきである。[15]

道順は「法爾の体性」について、[16]性徳円満の教法である密教は五智三十七智の智慧を開示し、本具輪円の法門なる密教は四種曼荼羅や三密の金剛なる本性を開顕する教法と説く。密教者は受法によってこれらの道理を顕わすのではなく、心の実体は本来の有り様として顕現している。この理を忘失していても妙果が隠れることはなく、身中において常恒不変である。敢て「我心即仏」・「我心普賢」に目覚め、「自身即法爾」と観想するまでもない。

道順の所釈に関する勅問がなされる。[17]「我心普賢」や「自身即仏」の執われを嗤い、自身即仏の言葉を厭離することは迷法に通じる。道順の意向に従うと、諸法法爾の境界では邪正による得失はなくなり、本不生の心中に迷悟の別さえなくなる。

糾問に対し道順は、法仏の自然なる智は、本より一切の暗黒から離れている。青嵐の響きや白水の音も、常恒の説法であり、如来の如義なる言説である、と申し開くことになる。[18]

④『理趣釈』等所説の「定恵均等。又云わく、二根交会」[19]に関する論義〈四月十七日〉

交会以前には空寂にして実体はなく、和合以後には正しく真性（事）を成ずるのであれば、前後の隔歴が生じ、迷悟もそれぞれ別となる、という勅問が下される。[20]了遍は、胎金・空有・定恵・理智は、本来和合の体であると解する。即ち和合の念を離れ、均等の執われもなく、平等中の平等にして不二中の不二である。しかしながら、深奥なる秘釈については未灌頂の人に申し上げることできない、と答弁する。[21]

道順は了遍の解釈を補足するように、まず「二根交会」等の論義は密教の至要に関する議論であると解説する。[22]両部不二は東寺教学不共の義であり、小野流に伝わる習いであり、醍醐寺と勧修寺の両流派は様相を別にする。両者共に事相上の大事であり、二派に浅深や優劣はない。但し、事相に関することでもあり軽々に口にできない。また真言行者が慈悲を具有すべきことは多くの経論に説かれる。慈悲について顕教と密教には浅深の別がある。本有の慈悲の顕われを密意とし、法然に衆生への利他がなされる様を深甚とする。

⑤自性法身と慈悲に関する論義〈四月十八日〉

了遍は、真言密教では最極の尊位において慈悲が生じ、衆生を済度することがあろうか、という質疑を提出する。[23]

実縁は、自性法身の妙観察智は法界を普く照らし正邪を謬ることがない。迷える衆生に起す如来の大悲は未来永劫に際限はない。最極自証の尊は、定慧を円満し自利と利他の二行を行じている、と持論を述べる。[24]

実叡は異義を唱える。自性法身が智慧を開き顕わす際には、

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

迷える衆生を観ることはない。従って一念の悲心を起すことはない。自性法身には、上に諸仏を求めることもなく、下に教導すべき衆生はない。[25]

勅定が道順に向けられる。道順は、仏には悲・智の両門があり、法には自利・利他の二利が備わると語る。[26]『菩提心論』には「仏心とは大慈悲なり」[27]・「悲を根本と為す」[28]と説かれ、空海の『辯顕密二教論』[29]には、自性法身に自利と利他がある、と著されている。自証の外に化他はなく、化他の外に自証はない。その自証は常恒の自証にして、化他は常恒の化他である。竪に論じれば五輪であり、横に顕わすと八葉になる。日光に自明と除闇の二徳が備わり、また薬草に自性と除病の両益があることにも譬えられる。化他と雖も法然本有の化他にして、実縁が拘りをみせる転迷開悟の行相としての化他ではない。

⑥真言行者と自利・利他に関する論義〈四月十九日〉

自性法身の慈悲及び利生について、議論を重ねるようにとの宣旨が下る。[30]了遍は真言行者の慈悲について、真言行者は専ら慈悲を備えて修行すべきことが経論にも明らかである。道順は日光が自明と除闇の二徳を有するように、仏には自利・利他の二徳が本来具有するとみなすが、これでは法爾なる真言行者は、強いて衆生に利益（利他）を施すべきことはなく、また行法（自利）も修すべきではなくなる、と尋問する。[31]

道順は、自説の解明を試みる。[32]真言行者の浄菩提心は、胎蔵生曼荼羅の中台八葉の諸尊に等しい。八尊は中尊大日如来の大悲の方便尊である。中尊をはじめ四仏は発心・修行・菩提・涅槃の五點であり、普賢・文珠・観音・弥勒等の四菩薩は大慈・大悲・大喜・大捨の四摂菩薩とみなされる。いうなれば「全体修行の体にして、全体慈悲の体なり」である。菩提を求める人が法界の衆生を哀愍し、精進や修行を喪失しないことは自然の理である。従って本具の外に現行の行はなく、今の行の外に本具はない。

⑦法爾と随縁の二門に関する論義〈四月二十三日〉

観昭は、いかなる凡夫であっても直ちに仏智に通達する法門が密教である、[33]と自らの想いを表明する。実縁は真言宗においては法爾・随縁の二門があり、法爾門には従因至果の義はなく、慈悲利生の法は明かされない。一方、随縁門は衆生界と仏界の二別が設けられ、大慈大悲の利益が施される。随縁門を生滅門と名付け、転迷道と呼ぶ。法爾門である自性法身は無縁の大悲を起こして、平等なる法の雨を降らせる。[34]

道順は、実縁の釈する法爾・随縁の二門の理解には隔歴が看取され、遮情遣迷の一途に相応し、真言密教の教理に相い反する。[35]空海が『声字実相義』[36]で提供する法爾・随縁は、法爾即随縁なる教理である、と反論する。

実縁は随縁は浅略にして、法爾は深秘である。しかも随縁

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

は法爾ではなく、法爾は随縁でないと改めて強調する。[37] 観昭は再び法爾・随縁の二門を隔てる解釈の誤りを指弾する。[38]

実縁は「随縁中の諸法は法爾を混えず、法爾中の諸法は随縁を混えざるなり」[39]とその姿勢を崩す様子はみられない。

道順は、法爾と随縁の諸法を分ける不審を訴える。[40] 実縁によると、浅略なる顕教等は法爾の教である密教の範疇から漏れ、空海の十住心思想における浅深さえ随縁による解釈に留まり、法爾になる側面が欠如することになる。『秘密曼荼羅十住心論』[41]には、横平等の法により竪差別の十住の心が設けられている。横・竪は一法の上の横竪であり、如實知自心における横竪である。竪差別の相による時には随縁の浅深がみられるが、横平等の一体においては、すべて法爾の体性となる。空海が重視する『釈摩訶衍論』[42]にも「平等々々にして一なり。然も終に雑乱せず」と真如・生滅の二門法の平等が論述されている。

⑧已入・未入及び邪行・正行に関する論義〈四月二十六日〉

観昭が、『妙法蓮華経』解釈に関する議論を発問する。[43]『妙法蓮華経』所説の長者の家に入るまでの窮子の所業について、円仁（七九四―八六四）は仏行と考える。ところで観昭は長者の家に入る以前の窮子の所業は戯論の邪行にすぎない、と判断する。

この指摘に対し、覚親は迷悟隔歴という観点からいえば、窮子の所作は邪業に見えるが、生仏一如平等の視座からは真仏の正行とみることができる。邪業の根源は貪瞋癡とされるが、密教では大貪をもって貪を治し、大瞋をもって瞋を治す。密教の立場から貪瞋癡の三毒に縛られる衆生を五智の薩埵とみなす。煩悩は即ち菩提であり、生死即涅槃である。このように長者の家に入る前の窮子は大毘盧遮那如来の智身にして金剛薩埵の智体である。[44] 実縁は覚親の説を憂いる。貪瞋癡の具縛から脱却するために、如来は大悲の善巧智による日輪観・月輪観や五相成身観等の三密行を教示する。覚親の意では貪瞋癡の三毒を是認することになる。[45]

道順は覚親の考察に興味を示しながらも、覚親の教説は本有（横証）門によるものであり、修生（竪入）門にまで及んでいない。[46] つまり従果向因による解釈に執われ、従因至果の法門はすべて顕教であると突き放す。真言密教は従因至果の門と従果向因の門の二門に通じる教門である。従因至果の門には常恒に四重上転の義が備わり、従果向因の門には法然に四重下転の義が伴う、という解釈を示すに至る。

⑨法爾の修行と迷情対治（修生）の修行に関する論義〈四月二十九日〉

入道大納言（了遍）が数日間に亘る法談に関して所感を陳べる。[47] 真言密教について議論されてきたが、見解の一致をみないばかりか、諸説が林立している有様である。速やかに密

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

教の正理を鮮明にすべきである。実縁は諸説生起の要因を事相上の事情と分析する。[48]

道順は、相承に基づく異説は避けがたいとしながら、真言密教が即身成仏を標榜し、法爾の瑜珈の深旨を表明することに異論が生じることはない、と論じる。[49]覚りを成ずるための迷情の対治に拘るのは実縁のみである。本有の横証を唱えるのは醍醐の教風であり、その教理は法爾の理に修生が備わることを特徴とする。密教の行法は、我身を金剛薩埵と自覚することにはじまり、或いは我身が大日如来であることを是認して、五相成身観等を修していくことになる。このように横証の果位を開顕すれば、自然に修生の妙行を発すことになる、と総括する。

三　まとめ

これまで亀山法皇の仙洞御所で催された論義『常盤井殿記録』に関する検証を試みた。本記録には、真言僧による真言密教全般に亘る本質的な議論、即ち機根論・修行論・二根交会の教理をはじめ、自性法身の慈悲や利他（行）、法爾・随縁二門を巡る議論など、今日的にも研究の対象となりうる論義が散見した。報告では『常盤井殿記録』で重要な役割を果たしている道順の教説を中心にその特徴について顧みた。

ところで道順は、真言教学史上に立川流を大成するに至ったとされる文観（一二七八―一三五七）の師として知られている。本記録は、文観や立川流の教理を再検証する上においても貴重な資料といえるが、常盤井殿での議論からは、醍醐教学の特徴とされる理智事の三点説に関する論及はみられるものの、後世に問題視されるような立川流の思想を髣髴させるような教理を窺うことはできない。

1　『常盤井殿記録』（高野山宝寿院所蔵）。　2　拙論「『常盤井殿記録』について」（『高野山大学論叢』四十六所収）。　3　『常盤井殿記録』本一帖裏―二帖裏。　4　『常盤井殿記録』本二帖裏―三帖表。　5　『常盤井殿記録』本七帖表―八帖表。　6　『大毘盧遮那成仏経疏』（『大正蔵』三十九・六一一頁c）。　7　『大毘盧遮那成仏経疏』（『大正蔵』三十九・六五三頁c）。　8　『常盤井殿記録』本十一帖裏―十二帖表。　9　『大日経疏』は恐らく『略述金剛頂瑜珈分別聖位修証法門』（『大正蔵』十八・二八八頁a）の誤りか？。　10　『常盤井殿記録』本十三帖表―十四帖裏。　11　『辯顕密二教論』（『定本弘法大師全集』三・七五頁）。　12　『常盤井殿記録』本十四帖裏―十七帖裏。　13　『成唯識論』（『大正蔵』三十一・四六頁b）。　14　『中観論疏』（『大正蔵』四十二・二頁b）。　15　『常盤井殿記録』本十九帖表。　16　『常盤井殿記録』本十九帖裏―二十二帖裏。　17　『常盤井殿記録』本二十三帖表―二十四帖表。　18　『常盤井殿記録』本二十三帖表―二十四帖表。　19　『大毘盧遮那成仏経疏』（『大正蔵』三十九・六二一頁c）・『大楽金剛不空真実三昧耶経般若波羅蜜多

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

理趣釈』（『大正蔵』十九・六一二頁b）。　20『常盤井殿記録』末一帖裏―二帖表。　21『常盤井殿記録』末二帖表裏。　22『常盤井殿記録』末五帖表―六帖表。　23『常盤井殿記録』末六帖裏。　24『常盤井殿記録』末六帖裏―七帖表。　25『常盤井殿記録』末七帖裏―八帖表。　26『常盤井殿記録』末十一帖表―十六帖表。　27『金剛頂瑜珈中発阿耨多羅三藐三菩提心論』（『大正蔵』三十二・五七三頁b）。　28『同菩提心論』（『大正蔵』三十二・五七三頁c）。　29『辯顕密二教論』（『定本弘法大師全集』三・百六頁）。　30『常盤井殿記録』末十六帖裏。　31『常盤井殿記録』末十六帖裏―十七帖表。　32『常盤井殿記録』末十七帖表―十九帖裏。　33『常盤井殿記録』末二十一帖表―二十五帖表。　34『常盤井殿記録』末二十五帖表裏。　35『常盤井殿記録』末二十五帖裏―二十六帖表。　36『声字実相義』（『定本弘法大師全集』三・四八頁）。　37『常盤井殿記録』末二十六帖裏。　38『常盤井殿記録』末二十七帖裏―二十八帖裏。　39『常盤井殿記録』末二十九帖表。　40『常盤井殿記録』末二十九帖表―三十帖裏。　41『秘密曼荼羅十住心論』（『定本弘法大師全集』二・三〇七頁）。　42『釈摩訶衍論』（『大正蔵』三十二・六〇〇頁c）。　43『常盤井殿記録』末三十六帖表。　44『常盤井殿記録』末三十六帖裏―三十八帖表。　45『常盤井殿記録』末三十八帖表―三十九帖表。　46『常盤井殿記録』末四十八帖表裏。　47『常盤井殿記録』末五十帖裏。　48『常盤井殿記録』末五十一帖表。　49『常盤井殿記録』末五十一帖表―五十三帖裏。

〈キーワード〉常盤井殿記録、亀山法皇、道順、機根、法爾・随縁

（高野山大学教授）

NII-Electronic Library Service